

# 2016 年度 機関誌最優秀論文賞

## 選考結果と受賞の言葉

### 第 4 回機関誌最優秀論文賞

---

学会奨励賞選考委員長 櫻村志郎

第 4 回機関誌最優秀論文賞は、森大輔会員（熊本大学准教授）「裁判にかかる費用や時間についての認識と裁判利用行動意図の関係：構造方程式モデリングによる分析」『法社会学』81 号（2015 年 2 月刊行）に授与されます。

なお、この賞は、2015 年 1 月から 2016 年 12 月までの期間に機関誌『法社会学』に公表された論文で、公刊時に 40 歳未満の会員の著作であるものなかから選考されること、この期間にこの条件を満たす対象論文は、森会員の本論文一編のみでしたが、最優秀論文賞の水準を満たすものと判断される場合に授与を行うことを委員会にて確認し、選考を行いました。

受賞論文の選考理由はつぎのとおりです。

森大輔会員の本論文は、裁判に時間と費用がかかりすぎるという印象が広く抱かれていることを前提に、その印象と裁判利用行動の意図の間の関連性をあきらかにしようとするものです。本論文は、近年行われた大規模な裁判利用にかかわる調査（その報告は、ダニエル・フット＝太田勝造編（2010）『裁判経験と訴訟行動』（東京大学出版会）にあります。）のデータを、構造方程式モデリングの方法で、再分析するものです。

本論文は、この調査のデータでは、裁判について費用や時間がかかることがきになるという特性が裁判利用意欲に単純には関連していないという結果となっていることを問題とし、この単純な無相関が、裁判利用を促進する相関とそれを阻害する相関とからなる複合的な関係の結果ではないかという仮説を検証していきます。本論文は、裁判利用の規程要因いかなという伝統的かつ重要な問題を対象に、既存の公表データに見られる興味ある不調和に着目し、その同一のデータについて、適切な注意を払いつつ適切な方法をもちいて再分析することで、新たな興味深い説明を提出することに成功しています。

こうした点から、本論文は、問題の設定、データの吟味、方法的検証の各研究手順を適切に遂行し興味深い知見に至っていること、また、既存公表データの活用という新たな研究分野の開拓に寄与することから、機関誌論文の優れたひとつのあり方を体現するものとして、授賞に値するものと判断しました。

## 受賞の言葉

---

### 受賞の言葉——第4回機関誌最優秀論文賞 森 大輔（熊本大学）

このたびは、拙稿に学会誌最優秀論文賞を賜り、誠にありがとうございます。

拙稿を書いたのは、「訴訟行動調査」のデータを二次分析している際に、「費用や時間が気になる程度」と「裁判を利用したいと思う程度」との間の相関を取ると、統計的に有意にならないことに気づいたのがきっかけです。裁判利用を阻む要因として、費用や時間が気になることがしばしば挙げられるのに、これはどうしたことだろうという疑問から分析を進めました。その際、「費用や時間が気になる」ことには、裁判利用を思いとどまらせるマイナスの側面だけでなく、裁判利用にプラスの側面もあるのではないかという仮説を立てました。費用や時間に敏感である人は、自分の権利や利益にも敏感で、裁判を積極的に利用するという、裁判利用にプラスの側面です。こうしたプラスとマイナスの側面が、打ち消し合っているのではないかという仮説です。

その仮説を、構造方程式モデリング（共分散構造分析）という、変数間の複雑な関係の分析に適した、比較的新しいデータ分析手法を使って検証しました。この手法では、変数間の関係を、パス図という図を使って視覚的に表します。利用例はまだ限られているようですが、パス図を書きながらあれこれ考えているときは、絵を自由に書いているような楽しさがあり、お勧めのデータ分析手法だと思えます。

拙稿で使用した「訴訟行動調査」は、特定領域研究「法化社会における紛争処理と民事司法」（研究代表者：村山眞維）という、約10年前の大規模調査の一部です。この調査データは、東京大学社会科学研究所のSSJデータアーカイブに寄託されており、申請すれば研究者なら誰でも使用可能となっております。そのため、拙稿の分析を第三者が再現して検証することも可能ですし、調査データを使用して新たな分析を行うこともできます。

そして、現在、基盤研究S「超高齢社会における紛争経験と司法政策」（研究代表者：佐藤岩夫）が後続の調査として進行中です。日本法社会学会の2017年度学術大会においても、この調査に関するセッションとして、「超高齢社会の法社会学研究の課題」が開催されました。10年前の調査では、私はまだ大学院生で勉強中の身でしたが、今回は調査メンバーの一員として、現在、全国の裁判所を回って裁判所記録の調査をさせていただいております。この調査が、法社会学会の研究者の皆様に使っていただける、共通の研究資源となることを目標としております。

最後に、10年前の「訴訟行動調査」にてご指導くださいました諸先生方、拙稿を査読して丁寧なコメントをいただきました諸先生方、ならびに選考委員会の諸先生方に心から感謝申し上げます。今後とも、諸先生方にご指導・ご鞭撻頂きながら、研究を深めて参りたいと存じます。